子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1997年7月1日発行　［隔月発行］

文化高知

'97年7月　NO.78

「プロローグ」市川雅彦

(財) 高知市文化振興事業団

夢

福留脩文

私は昔からいろんな夢を見る。空をよく飛ぶのは先祖が鳥だったのだろう。戦国時代の足軽で山野を駆けめぐったり、洪水時に決壊寸前の堤防を命がけで護るかつての土方時代の夢もいまだに見る。他人に言えない魑魅魍魎の世界もある。しかし、圧巻は五年ほど前、それも正月二日に見た。何度も訪れたスイスアルプスの銀色のアイガーが登場する。そして一生を水陸にすみ分けるカゲロウという昆虫が、長い水中生活から陸上に出て、美しい網目模様の羽根をゆっくり整えている姿に会う。何とも不思議な世界だった。絶滅寸前のカゲロウを護る、スイスの河川再改修の現場を見ていたのが伏線だったのだろう。以後、あれほど壮大な夢は残念ながら一度も見ない。

黒沢明監督の映画で、主人公が少年期から大人になるまでの出来事を「こんな夢を見た」という短編で構成した「夢」という作品がある。戦前のふるさとの甘酸っぱい思い出から、戦争を体験し、高度経済成長時代の環境汚染の恐怖などを綴った異色作だ。その中で主人公がタイムスリップして、のどかな農村風景を機関車のように描き続けるゴッホに出会うシーンがある。ゴッホは「お前はなぜ描かんのだ。急がねば時間がない」と語りかける。「絶景では絵にならん。何気ない風景がすばらしい」と諭している。

黒沢明監督は、あの映画でゴッホに何を言わそうとしたのか。いま高知県からも、その何気ない風景が段々と姿を消している。わが国は、戦後五十年の経済発展の過程を経て、世界有数の高所得国となった。しかし、多くの国民はその生活の豊かさを実感できない。画一化し均一化されてきた過密都市、自然が量的に減少し質的に劣化してきた農山漁村で、人々は癒される環境を無くし、他を思いやる心の余裕を失った。いま国民の願望は「物の豊かさより心の豊かさ」や「生活の利便性より自然とのふれあい」を求めているという。

かつて日本と同様、国民生活を自然災害から守り、経済発展のため国土の開発をすすめてきたスイスは、さらに絵はがきのように美しい都市や農村の景観づくりにも成功。しかしその結果、自然界から動植物たちが姿を消していく。やがてことの重大さに気づいた彼らは、これまで対立していた土木工学、経済学、生態学、景観の専門領域で直ちにそのしがらみを越え、新しい価値観による技術体系を構築していく。これまで経済性や快適性を求め人工的に改変した川や森や湖を、再び自然に近く戻してやることは、どれだけ人間の心に和み、安らぎや潤いを与えてくれるものか。長期的視点での経済面からも、合理性が立証される。

再び夢に帰る。犬もまた夢を見るのだろう。昼寝をしていたのがすっと立ち、「キャン」と鳴いたかと思ったらすぐまた寝たのを見たことがある。生まれてすぐ別れた母親のことを夢見たのか。誰も子供のころの夢を見るはず。子供のころの体験が、どれだけ人間の深層心理の中にインプットされているのか分からないが、みんなどんな夢を見るのだろう。いまの子供たちが幸せな夢を育ててくれているのであればいいが。

（ふくどめしゅうぶん・㈱西日本科学技術研究所代表取締役所長）

ヤマモモ

英保迪惠

近くのスーパーマーケットに行く途中の小径に、今年もヤマモモの小さな実がたくさん落ちて、赤い独特の色がコンクリートについている。今は熟成した香りだが、そのうちに発酵した匂いがたちこめるようになる。見上げると、うっそうと繁った濃いみどりの葉の元に、あるある、どっさり固まってヤマモモの実があちこちについている。若いうすみどり色からピンク、赤、黒くさえ見える熟しきった濃赤色まで、いっぱいの実である。手の届く枝を探して、やっと取って口に入れた実は、小さいながらもまさしくヤマモモそのものである。美味しい。上の方では小鳥もついばんでいる。

高知市の中心部に育った私にとっては、ヤマモモは毎日のように売りに来る人から枡で計って買うものであり、木を見るのはヤマモモ狩りに行く一年一回だけだった。その憧れにも近いヤマモモが足元いっぱい、十数メートルにもわたり落ちている。ひとりニヤニヤする。嬉しい、楽しい。心は豊かな思いに満ちる。

昔はよく家々の庭や空き地に生り物の木があった。ウメ、モモ、ビワ、イチヂク、カキ、ミカン…。小さいものではユスランメといったユスラウメ、グイミと呼んだグミ…などがあった。芽ぶきや新緑、花、それぞれに美しく、おまけに実が生って食べられる。子供達はこれらの木を長い竿で叩いたり、登ったりして収穫を楽しみ、実を味わっていた。

今、せっかくあるヤマモモの実を取ろうとする子供達を見かけない。ヤマモモを喰べないのだろうか。味が現代っ子に合わないのだろうか。木登りは危ないこととして禁止されているのだろうか。それにしても、もったいないと思う。落ちるにまかせて喰べないことはもちろん、短いこの季節だけの味、高知県の木であるヤマモモを味わおうとしないことも、生り物に目や心を移しその味や実りを楽しもうとしないことも、何もかも、もったいないと思う。

土地の高騰で個人が自宅に広い庭を持つのはむずかしいが、団地の庭や公園などの公共地に、生り物の木を植えてはどうだろう。そうして、小鳥が喰べるように人間もそれらの生り物を自由に取って食べてもよいということにしてはどうだろう、といつも思っている。

ずっと以前、高知市が児童公園を造るに当たって市民の希望をきいたことがあった。私は自然公園を提案した。ブランコ、滑り台、砂場のある画一的な作りものの公園でなく、極端にいえば市が取得した土地そのままを提供する、木に登って、たとえ枝を折っても実を喰べても子供は叱られない、雑草や泥んこもある、子供が伸びのびと、それぞれの創意工夫で遊ぶことのできる公園を。ところがそんな公園で子供が事故に遭うと権利意識の高くなった市民から苦情が出る、市は責任を追及され提訴されるかもしれない、だから安全第一の公園しか造らない、と回答された。

個人の権利の主張はもちろん大切で、尊重すべきだが、対応が過敏にすぎて失うものがあるとすれば考えものと思ったりもする。

（あぼみちえ・主婦）

「第13回高知市都市美デザイン賞」講評

都市美につながる高知らしさの創造

溝渕　博彦

十三回目の高知市都市美デザイン賞の選考にあたり、作品の傾向と審査基準についてまとめてみた。

今回の推薦件数は二十六件（実推薦件数二十一件、推薦者二十三名）で、昨年と比較すると少し減少の傾向にある。

内容は業務施設一、商業施設二、学校施設二、福祉施設四、公園一、橋二、病院二、集合住宅二、個人住宅四、その他一（銅像）となっている。推薦件数でみると老人向け福祉施設と個人住宅が特に目につく。

また目新しいものとしては、学校のコンクリート壁に生徒が書いた壁画、歴史的人物の銅像、樹木を使った学校の景観整備などがあった。

審査基準には、①都市美創造のモデル　②壁画や彫刻などによる文化的芸術的環境　③良好な町並みの景観　④周辺地域のシンボル性などの都市美の創造につながるものがあり、その他に施設の水準、環境との調和、波及効果などが検討された。全国的に没個性の建築が増加する傾向の中で、特に〝高知らしさ〟は大きなポイントになっている。

これらの基準に照らしあわせて、建築、住居、絵画、彫刻等を専門とする六人により選考された。以下入賞作品の講評である。

＊株式会社相愛本社
発注者　株式会社相愛
設計者　山本長水建築設計事務所

林の道を抜けると、数棟の木造の建造物が出現する。この事務所建築はボリューム全体を三つに分節してそれぞれを独立させ、各棟を渡り廊下で接続させている。そのため、全体から受ける威圧感、圧迫感といったものがあまりない。

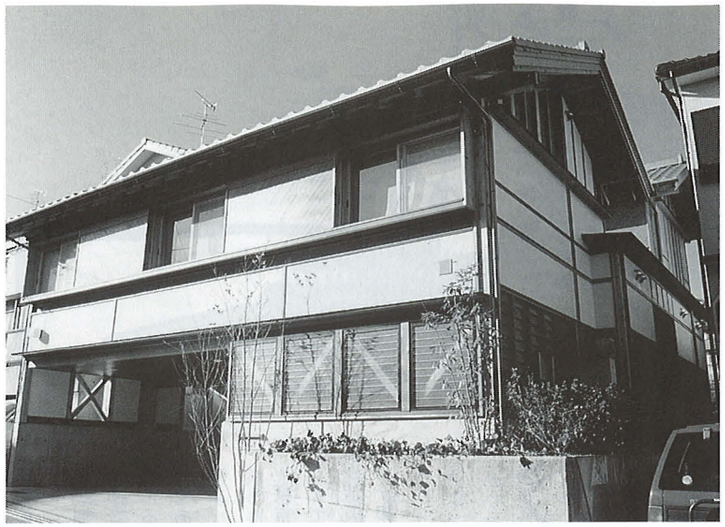
建築の手法としては、木の構造フレームを組み、床、壁、天井等の総てを木で構成し、それらの木のフレームにガラスを取り合わせ、壁はほとんど見られない。全体が木とガラスによる建築で、木から受ける安らぎとガラスを通して入ってくる光の透明感とが程良いハーモニーとなって、中で執務する人達にやさしい環境をつくっている。

この建築のもう一つの特徴は、建築のための敷地造成をしていないことである。一般的には斜面を段形に切って造成し、

株式会社 相愛 本社

その上に建築物を乗せる形をとるが、ここでは斜面をそのままにして、コンクリート基礎の上に木造のフレームを乗せる形にしている。そのため建築が山に馴染んでいる。

＊口細山の家（太田邸）
発注者　太田憲男
設計者　アクシス建築研究所



口細山の家（太田邸）

新興住宅地の立て込んだ中にある一軒である。何気ないたたずまいで気をつけないと見過ごすことになる。全体がスレンダーで、木造の調子を整えながら全体的に美しい形態をとっている。二棟の形式は強い感動を与えることはないが、全くそつがない。前面の南棟は、一階が駐車スペース、少しスキップして中庭があり、続いて北棟が配されている。北棟に比べ南棟は半階分程下がった高さにあり、これは居住部の北棟に対する日照条件への配慮からである。何気ない部分を良く考えた住宅だといえる。

＊水上邸
発注者　水上佳与子
設計者　艸（そう）建築工房

水上邸

RC造りで一階に車庫をとっている三階建ての住宅である。北側ファサードの建築は通常難しいが、この建築は北側である正面の個性をうまく生かして設計されている。即ち正面を構成するH型鋼のフレームを前倒しにして傾斜を少しとり、北側なるが故にそれほどふんだんに取る必要のない開口部については、細く分節されたグリッドで覆い、開口とグリッドとのコンポジションを巧みに使い分けている。サイドエレベーションで見られる屋上部のヴォールト型のデザインの巧みさも十分評価され、全体としてまとまりの良い住宅となっている。

選考の中ではさまざまな意見が出された。高知らしさをどうとらえるかは審査での大きな別れ目になる。地域で育てられた素材による構成、地域の気象や風土からの計画、高知の雨や緑を意識させるデザインなどがあった。

高知らしさを都市美につなげるのは単純ではない。それらの創造は、施主の価値観と建築家の感性が結ばれる所から始まるだろう。

（みぞぶちひろひこ・日本建築学会四国支部常議員）

家族プロジェクト

野村展子

「翔んでますね」と言われることがある。心の中で同音異義語に置き換えて「はい、飛んでます」と応える。飛ぶようになった事情を話せば長くなるからである。飛び始めて八年目の夏を迎えようとしている。

東京―高知間を飛び始めたのは一九九〇年四月のことである。東京―高知間を毎週飛んで七年の歳月が流れた。最初の三年間は東京―高知―東京と飛んだ。現在は高知―東京―高知と飛んでいる。最初の目的は一週間の半分を義母と共に高知で暮らすことであった。偶然が重なり今も飛び続けている。

一九八三年に夫の転勤にともない家族五人で高知から東京に移った。一九八八年に再び高知に転勤になった。家族は、子供達の学校の都合で東京と高知に分かれて住んだ。高知の家には夫と義母が、東京の家には世帯主として残った私と受験生の長男、留学から帰国すると受験生になる長女、小学六年生の次女が住んだ。二人の受験生の行き先が決まり、次女が小学校を卒業すると高知へ帰る予定であった。

「華子さんがなんだかへんよ」という連絡がはいった。芦屋に住む義母の実姉からであった。一緒に泊まる旅館の名前を繰り返し繰り返し電話で聞いてくるのだと言う。一九八九年秋のことであった。義母に会いに高知に帰った。仲間から「華さんの鶴の一声」と言われるほどにリーダーシップを発揮し、活発に世話役をこなしていた義母の面影はなくなっていた。

東京に戻り職場の友人に義母のこと子供のことを相談した。意見が二つに分かれた。「今一番大事なのは義母さんを病院へ連れて行って病気の進行を止めることよ」という意見と「今一番大事なのは試験を目前に控えた受験生よ」という意見であった。双方の話を聞いているうちに義母も受験生も今が一番大切であるということがよくわかった。体は一つしかない。しかし一週間は七日ある。東京―高知間を往復すれば義母と受験生の側に数日ずついることが出来ると発見した。

東京―高知を往復するためにクリアしなければならないポイントが二つあった。第一のポイントは自分自身の心であった。介護のスターティングポイントで自分の心を分析し点検評価しておく必要があった。自問自答してみた。なぜ義母の世話をするのか。嫁と姑の義理でするのか。世間の評判を気にしてするのか。人間としてするのか。あれやこれや心に問うていくうちに三十くらいの理由が浮かんできた。

とにかくやってみようという気になった。東京の職場に介護経験のある先輩がいた。彼女が推して紹介してくれたカウンセラーに相談した。人格が低下していくという。〝わかった、参った〟と思った。生半可な心の設定ではとうてい対応出来ない。天知る地知る人ぞ知るである。義理や世間体というような余分なものはいっさい切り捨ててスタートしようと決意した。

第二のポイントは交通手段であった。東京―高知間を時間的に効率よく往復するにはジェット機が一番便利であった。しかし一カ月に四往復すると月に約十五万円の航空運賃が必要であるという。もっともこの点は働けば何とかなるであろうと楽天的に考えた。働いた経験があった。

それは次女が生まれたちょうど一カ月後のことであった。それまで住んでいた天神町の家を出ることになった。どこかに雨露をしのぐ場所を探す必要があった。義母は寿町に住みたいという。天神町に住む前に寿町に住んでいたという。何となく義母の希望を叶えたいという気になった。銀行に相談に行った。丁重に断られた。働くことにした。誰に頼まれた訳でもない。ただ義母の希望を叶えたかった。実家の母にも早く安心して貰いたかった。そして何よりも夫の迷惑そうで嬉しそうな笑顔がみたかった。それが働く原動力であった。

経済的なバリアーは働けばクリア出来ると前回の経験で楽観していた。友人達の思いやりネットワークでNHK文化センターと二つの大学で講師として働けるようになった。NHK文化センターでは働いているという実感があった。受講生が一定数以下になるとそのコースは開講されなくなるという。つまり教える方は職を失うわけである。教室に自分ののれんをかけて授業をしているようなエキサイティングな気分であった。テキストや教授法の研究ばかりでなく、色彩の本を買ってきて服装にも気を配った。最初と最後は威厳のある色と紹介されていた黒の服を着た。〝TOEFL留学コース〟とよばれるハードなクラスであった。途中で受講生が息切れしてくるとフリルの付いたブラウスを着たり、優しい色・温かさを感じさせる色と紹介されていたピンクや茶系統の服を着て授業をするというような工夫をした。思いがけない数々の声援におくられて東京―高知間を飛ぶことが可能になった。

結婚して二十八年経った。結婚十年目に義母の希望を叶えようと張り切って外で働き始めた。結婚二十年目に義母の介護だと張り切って東京―高知間を飛び始めた。誰に頼まれた訳でもない。夫が喜んでくれれば本望とは思う。介護では自分はプロジェクト・リーダー、夫と子供達はプロジェクト・サブリーダー、義母に笑顔を向けてくれる人達は皆プロジェクト・メンバーと勝手に設定している。一期一会のプロジェクト・メンバーも数え切れない。多数の笑顔に囲まれて義母はすこぶる元気である。「お元気ですね」の笑顔に一層元気になる。多謝。

（のむらひろこ・土佐女子短期大学英語科助教授）

高知の日本舞踊

細木秀雄

高知は意外に文化活動の盛んなところである。地元の人はかえってそういうことに気付いていない。ということは文化や文化活動が日常化しているといえるかも知れない。

毎年春から初夏にかけての期間に開かれる高知市文化祭の全行事は、いつも七十を超えている。全国的にみても、こんな例はほかにあるかどうか疑わしい。過去に少し調べたことがあるが、他県の主要都市の文化祭や芸術祭は、美術展を中心にしてせいぜい十五ほどの行事が組まれているのが普通だった。高知市のように、文化活動が市民化している感じではなかった。

文化活動には上昇化するものと、一般化するものとがある。双方とも大事である。高知市でよく双方のバランスを保ちながら最も旺盛に活動しているのは日本舞踊だと思う。

高知県日本舞踊協会の会員は全員名取りで、その数四百名を超え、なかに師範級の人が百名ぐらいもいるから、アマチュアリズムの市民的文化活動とは趣が違うのは当然だが、名取りや師範といっても、昔と違ってみんながひとかどのプロというわけではない。しかし全国的に通用する卓抜な人たちが県日舞協会をリードしている。私が感服するのは、古典芸能を伝承し、それを再現するのに、極めて研究的に熱意をこめてやっていることである。

毎年の文化祭に各流合同公演「白鷺おどり」があり、今年は四十二回目を数えた。なかに全国からも注目されていて珍しいコンクール部門がある。

今年は「山姥」（花柳鶴志野）が市長賞を受賞した。この曲の眼目「山めぐり」を踊っていたが、残りの色香も艶もあり、格調乱れぬ山姥に仕上げていた。本来、能の「山姥」とは異質の作なので、歌舞伎舞踊の山姥を地味な老女に見立てるのは間違っている。「恨み過ごしの梶の葉は」から「あやめ葺く間に盆の月」までの部分をカットして、その間を長い合の手でつなぐところがとてもよかった。

白鷺会賞は二人が受賞。「雪の傾城」（新若柳多旬）は傾城物というジャンルがあるくらいだが、雪を主題にしているのは珍しい。哀感をさそう、しんみりしたムードで美しく踊ったのを評価された。だが、思うにあれは現代的な感覚でとらえた一面的な表現で、実は吉原の初春をうたったものだから、苦界を逆転化した発想が根底にある。古典舞踊は多義的なものを含んでいるのである。

「伊勢参宮」（坂東由佳三）は伊勢参りの道中の風物や人物を叙景的に描写したもので、古典曲のような非合理性はないが、それゆえの味気なさもある。踊りには安定感があった。

新人賞に当たる高知新聞社賞は「吉野山」の忠信（坂東藍乃）が受賞。いわゆる狐忠信だが、あまり狐にならず、匂うような若々しい忠信でとてもよかった。「千本桜」の原型では忠信の狐の本性が明かにされるのは次の「川連館」の場である。さわやかで踊りの線もきれいなのは天性の素質であろう。

このほど花柳壽應、芳瞠二十七回忌追善舞踊会が、花柳会四国支部の主催で、高知県民文化ホールで行われた。現家元の三世壽輔や後見役の五世芳次郎も先代追善のため来高して当代一流の芸境を見せてくれたが、なお四国だけでなく全国各地から花柳会の幹部多数が参集して盛大な会であった。こういう会が持てるのも高知の日舞界に地力があるからであろう。

数多い出し物のなかで、昼夜それぞれに、五世芳次郎が地元の舞踊家を相手にして踊った曲がある。昼は「二人椀久」（芳次郎、菖僑）で、恋に狂ってさまよう椀久がついまどろむところへ、幻の遊女松山が現れて、椀久とからみ合い、やがてまた消えてゆく―、人生の哀歓さながらに濃密な舞台を見せた。豪商だった椀久は現実の物狂いだが、実は恋そのものが狂気であり、人間の栄枯も人生も夢うつつのものである。菖僑の松山はセリ上がりやセリ下がりの前後もよく、冴え渡った踊りだった。

白鷺会賞受賞の「雪の傾城」（新若柳多旬）

夜の部は「将門」（芳次郎、華奈良）。相馬の古御所で、平将門の娘、滝夜叉が再起を計ろうとして、源頼信の臣、光圀に見顕される。滝夜叉（華奈良）は、遊女の姿で傘をさしてスッポンから出て、しばらく花道で振りがあるが、異様なムードが漂って、よかった。本舞台へ来て、クドキや光圀との踊りも無難にこなした。感情移入に今一息の感はあるが、姫の性根は上々。

「奴道成寺」（昌延）は、女形舞踊の究極の作品ともいえる「娘道成寺」を変型したもので、変形するモチーフは意外に近代的なものである。昌延は、立役の道成寺という奇趣をよく生かして踊っている。しかも白拍子を変形した狂言師を演じるのが女性舞踊家という複雑な面白味がある。

毬唄のところでは「誰と伏見の墨染」、三つ面のクドキでは「女子には何がなる」のあたりがいい。山づくしは端正に踊っているが、花四天が心もとない。

高知市唯一の無形文化財保持者、竹本一長が、「お七」（志輝路）、「お園」（昌一志）の出語りをつとめた。ひとしお感慨と愛惜の念を深くした。

（ほそぎひでお・高知市文化推進協議会会長）

白鷺会賞受賞の「伊勢参宮」（坂東由佳三）

市長賞受賞の「山姥」（花柳鶴志野）

お稲荷様界隈 6

久武　盛真

六歳ほど年の違う子供達の仲間には必ず面倒見の良い餓鬼大将がいて、理想的な人間関係がありました。どの子もみんなひもじくて、五台山でも黒門でも食べられそうな物なら渋柿だろうが栗だろうが椎だろうが、盗みを番人に吹聴するようにかん高く喚き散らしながらひねもす狼藉を働いたものです。

大正末期の青柳橋上流一帯は営林局の貯木場で水面が隠れるほど筏が繋いでありました。筏の上を跳び歩くスリルは満点です。親や先生に禁じられても、筏の下に鯊や海老がいる限り子供に禁則は通用しません。鹿三郎と熊喜と三人で鯊を釣っていると、通りがかりの見知らぬおばさんに大声で「コラーッ」と怒鳴られました。あんなおばさんが営林局の職員である筈はないし、筏を跳び渡って捕まえに来る敏捷さもあるまいから、こんなのにビビッていたら腕白稼業はやってられません。それにしてもあんなに仰山売れ残りを繋留出来たのは、営林局が国営だからこそで、民間の業者ならとっくに潰れたでしょう。当時如何に深刻な不景気だったかが窺えます。

この様に他人の子を容赦なく叱る人がいたのは醇風美俗です。今なら親に捩じ込まれること請け合いですが、うちの子も目の届かぬ所で何をし出かすか判らない。親の目配りにも限度がある。気付いた人に叱って貰うには、自分も気が付けば他家の子でも叱るべきだという連帯感が世間に徹底していたのです。

閑話休題筆山の黒門は山内家歴代の墓地です。大名の墓が麓にあると上の斜面には下々は遠慮して墓を造らぬと聞きました。門には厳重な戸締まりがありますが、我々には戸締まりはないも同然です。栗の実が熟れると無断で闖入しました。広い墓域は庶民の墓とは趣が異なり、馬鹿デカい墓がやや離れて点々と造られています。その規模は流石にお殿様です。昔でもこんな巨厳を運ぶ方法があったのです。無論ピラミッドや百舌鳥耳原中陵（仁徳天皇陵）には比ぶべくもありませんが、これを見れば誰だって人生観が一遍に変わるでしょう。

お稲荷さんの境内にはもうこれ以上は植えられないほどに献木があって、僅かに本殿の東北隅のお通夜堂の前が空いていました。

日当たりのよいお稲荷さんのお通夜堂前は、我々の格好の溜まり場でした。そこらじゅう砂糖黍やガザミの食べ滓だらけにして、掃除担当の糸叔母さんを顰蹙させました。

東南隅のアカチンポの実は境内で唯一の食べられる木の実で木の本名は槙です。小さな青い玉を二つ連ねた実が熟れると一方だけ赤く甘くなります。鳥はウジャウジャ居ましたから、早く見つけなければ鳥に食われます。

おやつは大体地元の駄菓子の他は、海や山や川や畑でとれる自然の物を好んで食べました。三軒お隣の料理屋の仲居さんの一人息子のシゲやんは、大人の歌が上手で歌唱指導をして仲間から駄菓子を稼ぎました。

御畳瀬のちくわを見てごらん
ナリはこまいがスは太い

と子供達は猥歌とも知らずに斉唱しました。

青のりや魚介類は自給しました。その間学業は疎かになりますが親もブツブツ言いません。小学校も上の学校も六十点とればOKだから、それ以上の点を取れと喧しいのは先生だけでした。百点迄なら呉れるから呉れるものなら貰わにゃ損々と言うさもしい心がけの子供は少なくて「六十銭でエエのに一円払うのはアホーじゃ」と言う奴ばかりです。

後に視学か教育長かにご出世なさった利岡富次先生は宿題を出しはしますが、しなくても小言は仰っしゃらない先生でした。宿題の帳面を忘れて取りに帰る子供を、同級生にこっそり尾行させるような先生は我等が下知小学校には一人も居ませんでした。

「盥から盥に移るちんぷんかん」と一茶は言いますが、今も忘れられないのは緑町の仕立て屋の一人息子の幸雄が死んだ日のことです。あの日二人で常盤町の交番所の裏の渡し船で中堤へ渡りました。渡し舟の船頭さんは万年蓄膿症で鼻が倍に腫れて口で息をしていました。当時の医療水準では治療はとうに諦めていたようです。素直で親切な人で呼べばすぐに無料で便宜を図ってくれました。

鏡川は折しも干潮で中州のぬるま湯のような水溜まりには、逃げそびれた小魚が死にもせずに封じられていました。中州ではシジミとアサリが簡単にとれます。時は移り帰る潮時になりました。幸雄を促して砂利の採取業者が気ままに掘った穴に気を付けて川を渉りました。背後で幸雄の叫びが聞こえ、振り返って手を差しのべるはずみに、ずるずると足元が崩れてガブリと水を飲みました。流されて足が立ちません。狼狽して溺れそうになりました。思わず大声で助けを求めました。

助けてくれたのは練習中の女学校の水泳選手でした。見回すと幸雄がいません。女子選手に告げると、懸命に探して呉れましたが幸雄の行方は知れませんでした。

帰って仕立て屋に告げると、何隻もの捜索舟隊が出て日が暮れてまで捜し、見つけた幸雄は既に硬直していました。

仕立て屋の夫婦に泣き泣き詫びを入れて、お弔いがすんで後も長い間仕立て屋の前を通りかねて、新地の電車の終点をわざわざ遠回りして緑町の稲荷湯へ夜道を通いました。

死ねば命も五体もなくなります。霊魂は四十九日迄は迷うと保証する坊さんもいるし、幽霊だの夢のお告げだのを信じる人も大勢いたけれど霊魂を見た人は居ません。思うに霊魂は食う迄は確かに見えているが、食えば消えてしまうちくわの穴のようなもんじゃろかいなぁと思ったものです。「墓は石の系図だ」とは安岡章太郎の言葉です。納骨堂の中身が幾柱か知る由もありませんが、お供え物は一式で拝むのも一遍こっきりです。五月に納骨堂は気にいらないと書いたのはこんな理屈でした。幸雄の墓参はしたことがありませんが今も気になっています。

（完）

（ひさたけせいま・泉文芸主宰）

出荷を待つ木材―高知市若松町―（寺田正写真文庫・高知市民図書館蔵）

県内考古事情

土佐考古通信（5）

山本　哲也

仁淀川遺跡考

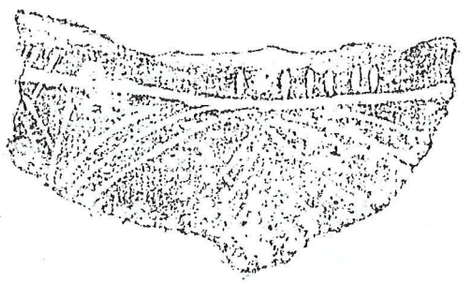
四国横断自動車道路建設工事に伴う発掘調査として、伊野町から土佐市へさらに須崎市まで各地で調査が進められている。このなかで、仁淀川をはさんで伊野町・土佐市側の遺跡調査から、興味深い事例があり、ここに紹介することにしたい。

伊野町の天王ニュータウンから少し西側に進むと、八田の集落が所在する。この八田地区において昨年度に神母谷遺跡・奈呂遺跡の調査が行われた。神母谷遺跡では、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけての土器が出土し、これまで四万十川（後川流域の入田遺跡）や物部川（田村遺跡群）沿いにおいて確認されている初期農耕に関連する集落の形成が仁淀川流域においても存在していた可能性が強くなってきた。つまり県下の米づくりの歴史が、四万十川や物部川だけではなく、仁淀川流域でも弥生時代の当初から開始されていたことが明らかになりつつある。二期作高知のイメージからすれば、あたりまえの事として片付けられそうだが、案外このような歴史的な事実関係の把握が行われていない。もし、このような資料が発見されていなければ、仁淀川流域での水稲耕作は県西部や中央部の弥生時代前期初頭の集落からの伝播論によって解釈され、独自の集落形成や展開を論じる機会が失われていたわけである。

神母谷遺跡からは、弥生中期後半や古墳時代前期の水路も検出されている。特に古墳前期の水路からは、大阪河内平野から運ばれてきた土器が出土し、木製農耕具類も見つかった。古墳前期の河内平野からの土器は、春野町仁ノ遺跡や高知市柳田遺跡からも発見されている。

奈呂遺跡からは中近世の屋敷跡とともに弥生後期の住居跡が検出されている。遺跡東側の丘陵沿いでは、春野町弘岡上奥谷遺跡・高知市朝倉城山遺跡・伊野町バーガ森北斜面遺跡など弥生中期後半～後期の遺跡が所在し、巨視的にみれば仁淀川左岸域の丘陵縁辺に遺跡群が形成されている。また、伊野町天神溝田遺跡・岩滝ノ鼻遺跡など、弥生時代の青銅器（銅剣・銅戈）出土地も所在する。

仁淀川の流域ではこの他に、春野町西畑フケ遺跡（中広・広形銅矛）日高村小村神社（中広形銅矛）などで青銅器が埋納されており、発見例が多い。このように、弥生時代の遺跡の所在や青銅器の集中分布は、高知市西部から伊野町南部・春野町北部にかけて弥生中期後半～後期の集団領域が存在していたことを物語るようである。各遺跡の詳細な検討を行えば、やがては仁淀川流域における弥生時代の地域政治集団（弥生集落の連合体）の実態が鮮明になるものと考える。この集団は、東は鏡川水系から浦戸湾口にかけて、北から西側にかけては宇治川、日下川水系の集落を傘下にした広範囲なものであったことが推察される。仮説ではあるが、銅鐸の祭りよりも剣や矛などの武器形祭器を使う祭りを受けいれた集団であったと考える。



弥生前期の木葉文土器（神母谷遺跡）

仁淀川流域への青銅祭器の埋納は仁淀川河口から海上にかけての交通路の存在を示唆しているようである。青銅器の搬入についても陸路ではなく海上交通によるものであり、県西部から船で運ばれてきた事が推測される。仁淀川から河口を経て海岸線沿いに浦戸湾口に至り、鏡川流域や小水系へ向う海上・水上の交通網は弥生時代中期後半以降には成立していた可能性がもたれる。仁淀川流域との海上ルートは、稲作伝播の経路とも関連づけられるかもしれない。

中世から近世にかけて、仁淀川河口から流域にかけては、多くの八幡神社が建立されている。松尾八幡宮や仁ノ八幡宮のように、仲哀天皇・神功皇后・応神天皇を祭神とするが、祭神は海上交通の安全を守る守護神でもある。

（やまもとてつや・高知県埋蔵文化財センター）

ミュージカル「絵金」の舞台に参加して（3）

三浦　良一

◇　五月に入ると、週二回の練習が始まりました。想像していた通り、ダンスレッスンには参りました。体力作りということで腕立て伏せ三十回、シャッテ、シャッテ、ジャンプの掛け声で一斉に空中へ飛び上がったり、体育館内を駆け巡る駆け足などがありました。

片足立ちで精いっぱいというのに、二回転ターンなどがあり、目を回しました。床に手も着かないという堅い筋肉の持ち主なのです、音を上げそうになりました。防音幕を引いた小学校体育館の暑かったこと、床はたちまち一面が、滴る汗で光っておりました。

ワン、ツーの掛け声は、やがて音楽に変わり、リズムに合わせての踊りが始まったのですが、これがまた大変。テンポが掴めず、動作は常に一～二拍遅れ勝ち、ビデオに映った不様な自分の姿にうんざりでした。自分なりには図を書いたり、文字化したりして振りを覚えようと懸命でしたが、年齢をつくづくと感じさせられました。ダンスは考えて行うものではなく、反射的に反応する若い運動神経が大切だったのです。

とは言っても、若者達も苦労していました。振り付けは変わっていくし、次第にレベルアップが要求されたのです。インストラクターからはよく叱声が飛び出しました。みんな元気に頑張っていると思ったのですが、時には名指しで叱責され、ベソをかく女の子も出る始末。それだけに、ふと出てくる石川先生のユーモアは、値千金でした。

「レッスン場へ入ったら、背を伸ばして、いつもお尻に一万円札を挟んでいるつもりになりましょう。ハイ……さん、お札が落ちましたよ」。

◇　歌唱指導は東京からヴォイストレーナー専門の方も来られて、リズムやメロディーのとらえ方、腹式呼吸やブレスの取り方、発声はうがいの要領で軽く軽く、などと教わりました。歌といえばカラオケで演歌がせいぜいという私、オタマジャクシにも無縁な身でしたが、十六ビートとは何かといったことを体感し、ラップにまで親しむなど、貴重な体験をさせて貰ったと思っています。

やがて、次々と劇中の挿入歌に曲がついて来たのですが、詞というものがこんな風に立ち上がって来るのかと、門外漢の私は、そのたびに驚いたり唸ったり、作曲グループの皆さんに、ただ感嘆するばかりでした。中でも『絵金さん絵をかいて』の童歌のフレーズは鮮烈でした。

間もなく本格化したレッスンの中で、演技指導も本読みから立ち稽古、小がえしへと次第に厳しくなって行きました。

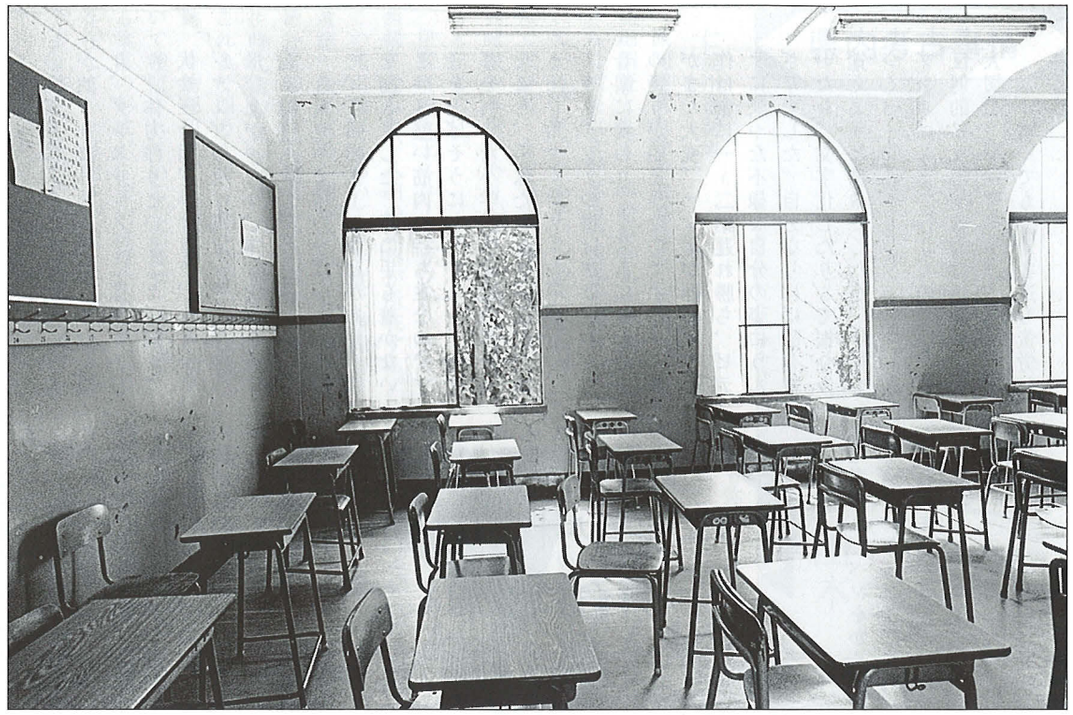
「もっと声を出せ」という指導を受けた時には、一人、体育館の端に立たされ、オーイ、オーイの叫びを重ねました。「なに、聞こえないぞ」という先生の仕草に応じ、喉のかすれるまで悲鳴をあげたのですが、謙虚？な六十年の生活歴を物語るのでしょう、私の声はいかにもか細く、通りの悪い台詞になってしまうのでした。

通し稽古のリハーサルに入った稽古場は、常に帆足演出の叱咤の声に満ちていました。

「もっと自然に！」「学芸会じゃないぞ……」「そこは全身で表現を」「駄目だ、目が死んでる……」ついには「阿呆！」という一喝が飛んで来るのです。頭から怒鳴られて、余計ぎくしゃくする状況もあり、少しは演者の気持も聞いて……と感じる時がありましたが、時間不足と素人相手では、そんな余裕は無かったのでしょう。

飛び出して行って、演じてみせるというのが、先生の姿勢でした。役者は人形じゃ無い、と思うこともありましたが、四十年のキャリアを物語る先生の演技は、何時もピタリと決まって、文句を言わさない見事さでした。

（つづく）



高知を撮る

第13回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

追憶の学舎

森田清一

別にコーヒー屋さんの片棒を担ぐつもりはないが、〝違い〟が大切にされる時代になってきた。個性、多様、地方分権などの言葉から連想されるイメージは、一億一心、天皇、官僚などの言葉から生まれるそれのまさに対極にある。歴史の歯車は、〝教科書が教えない〟過去に決別して、着実に前に向かって回り続けているようである。

若者たちはさまざまな方法で〝違い〟を表現しているが、Tシャツの胸や背中のメッセージにも、時代が映っている。ベトナム戦争当時に見られたような硬派のメッセージはすっかり影を潜め、どちらかと言えば、優しさの主張が目立つようである。日本語で書くと、きざな言葉も外国語で書くと、それなりに格好よく見えるから不思議である。でも、中には、どう見ても不釣り合いなメッセージを胸にしている若者もいて、「君、この意味分かっているの？」と聞きたくなることもある。

先日、胸のあたりに、〝ONLY〟と印刷した上着を着て歩いている若い女性を見てギョッとした。細身で、おとなしそうな女性である。もしかしたら純情な彼女は、貴方に〝だけ〟上げる、というけなげな気持ちを表したかったのかもしれない。

年配の人は誰でも知っているように、我が国には戦後の一時期、〝オンリーさん〟と呼ばれる一群の女性が存在した。戦後入ってきた進駐軍を相手に稼ぐ女性のうち、金回りのいい特定の軍人のみを相手にする者が、仲間うちで、なかば尊敬を込めてこう呼ばれていたのだ。

そのようなことは、遠い過去のこととして、彼女はさっそうと歩いて行く。今や、「ONLYさん」も立派な死語である。

いつの間にか、明治、大正に続いて、〝戦後〟も、遠くなったようである。

（路）

ONLY

風俗歳時記

寺田寅彦は、随筆「郷土的味覚」の中で「高知近傍には寒竹の垣根が多い。すきまなく密生しても活力を失わないという特徴があるために垣根の適当な素材として選ばれたのであろう」と記している。65年前のこと。

高知市内ではほとんど見られなくなった。手入れが面倒なためだろうか。写真は西町の一角。昔のままの小道を挟んで見事な「寒竹の垣根」が健在している。

風伯

ノーマライゼーション

『変わっちゅうろうか』という本を読んだ。高知県立精神保健福祉センター企画・高新企業出版。

「青銅の涙」という映画を制作した山本二昭さん（五月に上映された）。土佐病院で障害者の社会復帰に力を入れているソーシャルワーカーの伊藤博子さん、同病院のデイケアセンターで精神障害者に絵を教えている織田信生さん、精神保健福祉センターで精神障害者に詩を教えている大崎博澄さんら十二名の手記が載っている。

いずれも精神障害者の「ノーマライゼーション」に力を尽くしている方々。

「ノーマライゼーション」は、英語の「ノーマル（正常な）」に由来する。「ノーマライズ」は「正常化する」という動詞。「ノーマライゼーション」は「正常化すること」という名詞である。

デンマークで五〇年代後半から使われはじめ、日本では八一年の国際障害者年以後受け入れられた。

『看護・医学事典』をみると、「障害者は障害に関係なく地域社会の他の市民と同じ生活をする権利があり、そのようなことが可能な社会こそがノーマルな社会であるという考え方およびその社会的定着を目指した運動」とある。

なによりも大切なことは、大崎さんが言っているように、『「弱者を守ってあげる」のではなく、……皆が等しくありのままに「在る」こと』であろう。

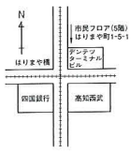
（仁）

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地　高知市はりまや町一―五―一　デンテツターミナルビル5F



お申し込み　(財)高知市文化振興事業団　☎73―4365

清流を子らへ

――21世紀に残したい鏡川――

高知河川環境研究会編

A5判・並製本122頁・本体価格1,000円

時代とともに急速にその姿をかえる鏡川。その変貌ぶりを憂い、何とか清流を復活させ次代の子どもたちに残したいと研究会メンバーがおくる熱いメッセージ。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

高知の高齢者と保健福祉

井本正人・真田順子・藤岡純一　編

A5判・並製本112頁・本体価格1,000円

高知県内における高齢者の保健福祉について、実態とニーズを調査し、具体的な政策提言を行う。

※市内主要書店、又は当事業団でお求め下さい。

賛助会員募集中!!

会費　年額　2,000円

特典　①　機関誌「文化高知」を年6回お手元にお届けします。

②　事業団発行の出版物の10%割引（一部例外あり）

③　主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）

〔※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効〕

お申し込み　①郵便振替②現金書留③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

1997年度日本公演

ウルマー・シュパッツェン交流コンサート

ドイツ・ウルム市からのジュニア合唱団と県下の高校生とのコンサート

日　時　8/9(土)　PM2:00(PM1:30開場)
場　所　高知県立追手前高等学校芸術ホール
入場料　¥1,500

この催しはドイツ・ウルム市のジュニア合唱団（団員39人、スタッフ7人）を招き、高知の高校生との交流コンサートを開催し、音楽を通じた国際交流を図ろうというものです。

この合唱団は1958年に創立され、ヨーロッパやアメリカへの演奏旅行やレコード録音を行うなど幅広く活躍しており、1990年の日本演奏旅行では12ヵ所で交流コンサートを催しました。

高知への訪問は初めてで、交流会とコンサートについては県内協力高校の生徒たちが企画・運営を行っています。

賛助出演/土佐女子中学・高等学校コーラス部
主催/ウルマー・シュパッツェン実行委員会
（財）高知市文化振興事業団

●ウルマー・シュパッツェンとは「ウルムの雀」という意味で、十二歳から二十一歳までの少年少女で構成、約三十年の歴史を持つ実力派の合唱団です。ウルム市はアインシュタイン博士の生まれた町でもあります。

高校生ボランティアが運営

市内協力校の三十人以上の高校生ボランティアスタッフが実行委員会を結成、出迎え、交流会、コンサート本番などについて役割を分担し、熱心に話し合いを重ねています。

●助成／㈶高知新聞厚生文化事業団●後援／高知市・高知県教育委員会・高知県合唱連盟・㈶高知県国際交流協会・高知西高等学校国際交流推進会・高知日独協会・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ・高知新聞社・朝日新聞高知支局・毎日新聞高知支局・読売新聞高知支局●協力／土佐女子高等学校・高知西高等学校・土佐高等学校・高知学芸高等学校・高知高等学校・高知ミナポート会●チケット発売／高新プレイガイド・チケットセゾン・チケットぴあ・高知市文化振興事業団●お問い合わせ／㈶高知市文化振興事業団

財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73-4365
郵便振替01680-5-14869